第三話

平井権八、小幡兄弟、極悪の奸計をめぐらす

「えぇーい！」

「やぁーあ！」

甲高(かんだか)い女たちの声が長屋じゅうに響きました。続いて男の声。

「振り上げたときは手の力を緩(ゆる)めて、振り下ろした時に腰を落として柄(つか)を引き絞るの！

さ、もう一回！」

「えぇーい！」

「やぁーあ！」

芝新網町(しばしんあみまち)の夜鷹(よたか)長屋。八重(やえ)をはじめ夜鷹たちが狭い路地に整列し、手にした木の棒を振り下ろしております。

その傍らで指南をしているのは、夜鷹姿の赤牛弥五衛門(あかうしやごえもん)。ここの用心棒を引き受けてから十日、今では、昼過ぎに家を出て長屋に赴いて夜鷹たちに剣術を教え、夜は用心棒として彼女らの縄張りを見守り、明け方に家に帰って昼間で眠る。そんな毎日を送っているのです。

「ご精(せい)が出ますね」

そこに、木戸口をくぐって現れたのは、荒牧小夜(あらまきさよ)です。

「あ、小夜さまだー！」

「わー、今日もおきれい！」

稽古も木の棒も放り出し、夜鷹たちが小夜を取り巻いて大騒ぎするなか、八重は、放置されたまま呆気に取られる弥五衛門の肩を叩き、

「ほんと、小夜さんは女が惚(ほ)れる女だねえ」

と笑いかけると、弥五衛門も苦笑して、休憩にしますか、と呟き、縁台に腰を下ろしました。

「今日のおみやげは、お団子ですよー」

小夜が手にした竹包みをひらひらさせると、夜鷹たちは歓声をあげ、さっそく配られたお菓子を「あまぁい」「やわらかぁい」「小夜さんから頂いたというだけで、おいしーい」

とまたも大騒ぎ。
その様子を眺めていた小夜、ふと、木戸の隙間から覗(のぞ)く視線に気付きました。
誰か、外から長屋の様子を見張っているのです。
さりげなく木戸に近づき、いきなり開くと、そこに立っていたのは、道着姿の母衣菊乃(ほろきくの)でした。
「あれ、菊乃さん？」
驚く小夜に、菊乃は顔を真っ赤にして慌(あわ)てふためき、
「違う違う、私は別人だ！　母衣菊乃ではない！」
とわけのわからぬ事を叫ぶと、踵(きびす)を返してかけ出したのです。
「え、別人って……」
茫然と立ちつくす小夜を見ながら、弥五衛門、
「誰？」
呆れたように問うと、八重は、
「小夜さんに惚れてる一人さ」
と苦笑しました。
「素直じゃない人だなぁ」

「一体、私は何をしているのだ！」
せかせかと往来を早足で歩きながら、母衣菊乃はぶつぶつと独り言を呟きました。
「いま私がせねばならぬのは、道場の繁栄を取り戻し、お家を再興すること。幼なじみとはいえ、夜鷹の用心棒などやってる女の様子を見に行っている暇などないはずなんだ。ああ、しっかりしろ、母衣菊乃！」
とそこまで口にして不意に脚を止め、
「とはいえ、仕官を頼む手蔓(てづる)もないしなあ……」
と俯(うつむ)いていると、
「やい、邪魔じゃ！」
いきなり、後ろから突き飛ばされました。
「何やつ！」
振り向くなり、菊乃の右足が跳ね上げられました。爪先が、背後から押した男の股間に突き刺さっております。黒の紋(もん)付き袴(はかま)を身につけ身分の高そうな武士でした。白眼を剥(む)

き、嘔吐をこらえるような顔になって硬直しておりましたが、やがてどさりと俯せに倒れました。

「やや！」

「慎太郎どん、大丈夫でごわすか？」

「こりゃ、おはん、何をするか！」

倒れた男の朋輩と見える、訛りのきつい武士三名が、菊乃を取り囲みました。

「いきなり、後ろから人を突き飛ばしておいて、何をするか、とはなんだ！　おぬしらそれでも武士か！」

菊乃は腰の刀に手をかけ、叫びました。女の声に武士たちは意外そうに首を傾げ、

「ありゃ」

「女でごわすか？」

「女が、道着など着て刀なぞ差しちょる」

「それで男のきんたまを蹴るとは、江戸とはおそろしか所じゃ」

「なんだ、おぬしら江戸の者ではないのか？」

呆れた菊乃の問いに、三人のうち太った武士が言いました。

「わしらは、薩洲 島津家の者じゃ」

「薩摩っぽか」

現在の鹿児島県出身と聞いて、腰を落として油断なく身構えながらも、しばし記憶をまさぐっていた菊乃は、不意に「薩摩といえば、あれだ！」と叫んで問いました。

「ならばおぬしら、関ヶ原の退き口の話は聞いておろう」

「おお、関ヶ原の退き口！」

武士たちは顔を輝かせて頷きあいます。

「薩摩武士で、退き口の話を知らぬ者はごわはん」

慶長五（一六〇〇）年九月十五日、美濃関ヶ原で天下分け目の合戦が繰り広げられました。西軍に属した島津義弘ら薩摩勢千五百は、小早川秀秋の裏切りで味方が総崩れになったのを見、混乱する戦場のなかを大胆にも徳川家康の本陣の前を突っ切る形で突破し、戦線離脱に成功したのです。しかしその途次に多くの兵を失い、堺から故郷へ向かう船に乗った時には味方は八十人に減っていました。このエピソードは、武士の意気地や祖先の苦難を忘れないようにとの意図で、代々子供たちに語り継がれてきたのです。

「さようか、おはん、関ヶ原の退き口をご存知でごわすのか。これは女子ながら、お見そ

れ申した」
頭をさげる薩摩武士たちに、菊乃はえへんと胸を張り、
「軍記物で知った。薩摩武士の気概に心打たれたものだ。泰平の世にあっても尚武の気風を忘れないのが武士というもの。それをなんだ。刀をさした武士の背を突き飛ばせば、振り向きざまに斬られてもおかしくないのが戦場。命を取るまでもないと、きんたま蹴りで勘弁してやったが、薩摩隼人とあろうものが常在戦場の心得を忘れたか」
とお説教すると、意外に素直な薩摩武士ども、
「いやいや面目ごわはん」
赤面して頭を下げた後、一人の太った武士が声を低め、
「あの慎太郎という仁、われらが殿の御連枝（親戚）であることを鼻にかけ、威張りちらすしか能のない嫌われ者。実は、おはんにきんたまを蹴り上げていただいて、痛快なのでごわすよ」
他の二人も頷きます。太った武士はさらに言いました。
「申し遅れましたが、わしは薩摩藩士・西郷橘之助。お近づきのしるしに、一献さしあげたい」
「わしは同じく、大久保逸蔵」
「わしは同じく、東郷平七郎。ささ、どうぞどうぞ」
失神した仲間を置き去りに、薩摩藩士たちがわいわい言いながら菊乃を案内し、酒場へと向かうのを物陰から見つめ、
「まさか、あいつか……？」
と呟いた者がおります。
平井権八でした。傍らには、小幡伝太夫が立っております。
町奉行小幡越後守の密命を受け、芝新網町の夜鷹征伐に乗り出した小幡兄弟と平井権八ですが、充分に同志が集まったのを見計らい、現地偵察に着手しました。
まず、平井権八と小幡伝太夫が仲間一人を連れて長屋に赴く途中、立ち寄った茶屋の縁台に据わって、女剣士と薩摩武士らの喧嘩と仲直りの一部始終を見ていたのです。
「怪しいか？」
と問う伝太夫に、平井は頷きました。
「女だてらに隙のない身構え。あれは結構な使い手ですぞ」
「しかも、相手のふぐりを蹴り上げ、失神させた」

俯せに倒れたまま身動きしない薩摩武士を見つめ、伝太夫は呻くように言いました。
「恐ろしい女だ」
「あの女、例の夜鷹長屋の方角から現れましたな」
「そういえば……」
「あの女が用心棒の一味だとすると、女にふぐりを潰されたという、拙者の同志のうわごとにも合致します」
「おお、なるほど！」
「取り敢えず、後を尾けるとしましょう」
平井は縁台に茶代を置き、伝太夫を促して立ち上がりました。

その夜。
居酒屋で薩摩武士たちと酒杯を重ね、合戦談義で盛り上がり、いい気分で酔っぱらった母衣菊乃は、千鳥足で道場への帰路を辿っておりました。
「ああ、いい気分だ。久しぶりだ。しかも、おごってもらってタダ酒だ。タダ酒ほどうまいものはない。薩摩の武士は、旗本なんぞより数倍いい連中じゃないか」
ふと、道ばたの柳の下から、菊乃の行く手を立ち塞ぐように現れたのは、言うまでもなく平井権八と小幡伝太夫です。
「失礼します」
怪訝な顔で立ち止まった菊乃に頭を下げた平井は、言いました。
「拙者、元池田家藩士平井権八。今はわけあって藩を離れ、町奉行の配下で働いている者です」
「町奉行？」
菊乃は不審そうに尋ねました。
「そのとおり」
小幡伝太夫が進み出ます。
「かくいう拙者は、その町奉行小幡越後守殿の身内の者。少々お話ししたいことがあるのだが、どうだ、別の店で呑み直さぬか」
「呑み直し？」
菊乃はしばらく考え込んでいましたが、やがて口を開きました。
「おごっていただけるのか？」

「ああ、むろんだ」
そう答える小幡に、菊乃は顔をほころばせました。
「今宵は、おごってくれる相手に恵まれた。ありがたいことだ」

「ばっかものぉ！」
いきなり怒鳴りつけ、並んだ徳利や酒肴の皿が飛び上がるほど机を平手で殴り、母衣菊乃は叫びました。
「誰が夜鷹の用心棒だ！　私はこう見えても、戦国以来の名家母衣家の跡取り。わずかな端金で己が武を安売りするような真似はしない！」
茫然となった平井権八や小幡伝太夫を前に、菊乃はわめきちらしました。
「いやいや、そんなつもりで聞いたわけではない」
居酒屋の客がいっせいにこちらを見るなか、伝太夫は言いました。
「ただ、その……芝新網町で夜鷹の用心棒を務める武士がいると聞いてな、辻斬りが横行するなか感心な事じゃと町奉行殿がおっしゃられて、どのような御仁か見てこいと言われたのだ」
「で、なぜ私がその用心棒だと思ったのだ？」
「まあ、なんと言うか……」
伝太夫はにやにやしながら言いました。
「女の身で、まるで武士のような姿。そのような酔狂な真似をする人ならば、あるいは、と……」
冗談めかしたつもりが、かえって菊乃の怒りの火に油を注ぎました。
「酔狂だと？」
菊乃は、怒髪天を衝く勢いで立ち上がりました。
「不愉快だ！　私、帰る！」
「貴様！　下手に出ておれば生意気な、女の癖に！」
顔を真っ赤にして小幡伝太夫も立ち上がりました。腰の刀の柄に手をかけております。
菊乃はますます激高の様子。
「女だから、なんだ！　私は生まれてこの方、男を相手に不覚を取った事はない！」
「男を侮辱するか！」
目を血走らせ、小幡は怒鳴りました。

「抜け！　勝負だ！」
「まあまあ」
隣に坐ってにやにやしながら成り行きをいていた平井権八が、笑みをおさめて小幡の袖を掴んで宥め、菊乃に向かって頭を下げました。
「確かにわれらが無礼でした。母衣家といえば、権現様（徳川家康）の天下取りに貢献した名家。その母衣家を継ぐあなたさまが、夜鷹ふぜいの用心棒などなさるはずがございますまい」
「夜鷹ふぜい？」
菊乃はそう言って、面差しを引きつらせました。それに気づかぬげに、平井はさらに言い募ります。
「さよう、夜鷹のような人間のくずの用心棒を務めて日銭を稼ぐなど、誇り高き武士の血をひく方ができようはずもありますまい」
「ちょっと、待て」
菊乃は、静かに言いました。
「人間のくず、だと？」
怒りのこもった眼差しに口を噤んだ平井と小幡に、菊乃は続けました。
「おぬしら言うてみい。武士はなんのために、俸禄を賜っておる」
「それは……」
伝太夫が、狼狽えながら答えました。
「先祖がご公儀に尽くした武勇への御礼として……」
「ちがーう！」
菊乃は怒鳴りました。
「天下の治安を守り、万民を慈しむことこそが、武家の役目。そのために、たとえ無役であっても俸禄を賜っておるのであろうが！　それがなんだ、人間のくずだと？　たまたま貧しい家に生まれて、なんとか糊口を得るために辛い仕事についている女たちを人間のくずとは、貴様らこそ、恥ずべき犬畜生だ！」
「あ、いやしかし……」
今度は小幡が必死で宥めます。
「最前、端金で己が武を安売りするような真似はしない……と」
「用心棒の仕事などしないという意味だ！　守る相手が夜鷹だからではない！　小夜にも

そう言って断った！」
「さよ？」
平井が、鋭くその名を聞きつけ、口を挟(はさ)みました。
「人の名ですか？」
「あ、いや……」
頬を赤らめて、きょろきょろ見まわし始めた菊乃に、平井はさらに問いました。
「その、さよという人から、夜鷹の用心棒を頼まれたのですか？」
「うるさいうるさいうるさいおぬしらには関係ない！」
菊乃は絶叫し、椅子を蹴って居酒屋を飛び出しました。呆然とする小幡の傍らで、平井が顔をほころばせました。
「ひとつ手掛かりができましたな」

「ああ、ああ、あいつらほんとに腹立つ！　人を馬鹿にしやがって！」
せかせかと両手を動かして早足に歩きつつ、菊乃は例によって大声で独り言を叫んでおりました。
「だいたい小夜がなんだ。あいつらには関係ないだろ。余計な事聞いてんじゃない！」
とそこまで叫んで菊乃は足を止めました。しばしうつむき、ぽつりと呟きました。
「私……やっぱり……」
目じりに涙を浮かべて、菊乃は声には出さず口のなかで言いました。
小夜の事となると、こんなに取り乱してしまうの？
そこで、はっと気づいたように、菊乃は顔をあげました。
「なんであいつら、芝新網町の夜鷹に、用心棒がいるって知ってたんだ？」
町奉行の身内だとか言っていたけれど……。
菊乃は、踵(きびす)を返して、今来た道を戻り始めました。
「なんだか、怪しいな。小夜さんに言っておいたほうがいいかもしれない」

「あ、小夜さん！」
芝新網町、渋谷川のほとり。
客を待つふうでもなく、佇(たたず)んでいた八重は、現れた荒牧小夜に向かって笑顔で手を振りました。

「どう、景気は？」
「調子いいよ。弥五さんのおかげで」
八重は、赤牛弥五衛門が見回ってくれているおかげで、夜鷹たちも安心して商売に出かける事ができ、稼ぎも増えている、と告げました。小夜は顔をほころばせ、
「それはよかったわ」
と頷きます。八重はさらに付け加えました。
「弥五さんに剣術を教わったのも、よかったみたい。辻斬りが出たらやっつけてやるって息巻いてる子もいるからね」
「生兵法は怪我のもとだから、あんまり頭に乗らないよう、注意してあげてね」
「そうだね。注意しとく。ところで……」
八重は小夜の顔を覗き込むように言いました。
「今夜はどうしたの？　仕事の帰り？」
「いや……ちょっと眠れなくて」
「へえ、どうしたんだい？」
「うん、実は……」
小夜は唇をかみしめて言いました。
「今朝、菊乃さんが、長屋を覗いていたでしょ？」
「ああ、あれね」
八重は笑って、小夜の肩を叩きました。
「小夜さんに惚れてる道場主だろ？」
「そう……」
八重は、ますます項垂れた小夜の眼が潤んでいるのに気づき、笑みをおさめました。
小夜は言いました。
「菊乃さんに声をかけた時、彼女、自分は菊乃じゃない別人だ、なんて言ってたでしょ」
「あはは、そうだったね」
八重は、空気を変えようと笑いました。
「なんで、あんな見え透いた嘘つくんだか。惚れた弱みかねえ」
「どうかしら。ただ……」
小夜は、寂しげに夜空を見つめて言いました。
「なぜ、わたくしに面と向かってあんな嘘をついたのか……。あのことを思い出すと、胸

が痛んで、どうしようもなくなるの」
「え、そう？」
八重は言いました。
「そんな気にするような事かなあ。まるで、初めて女に惚れた童貞の男の子みたいで、おかしかったけどね」
誘い笑いをしようとして、八重は、口を閉ざしました。
小夜の眼から、涙がこぼれ落ちたからです。
しばし黙した後、凝視する八重に気付き、小夜は涙をぬぐって、言いました。
「わたくしも、初めて、惚れた相手なの」
「え……？」
きょとんとする八重に、小夜は声を絞り出しました。
「わたくしの、初恋の相手なのよ」
「誰が？」
「菊乃さん……」
小夜は、その名を口にして、晴れ晴れとした面差しになり、照れたように笑って言いました。
「わたくしが、父を亡くし、長崎に発つ前の朝、抱きしめて、口を吸ってくれた。一生でいちばんの思い出よ」
「ふうん」
八重もほっとしたように微笑みました。
「相思相愛か。うらやましいね」
「でもね、日本に帰ってきてすぐに再会したのだけれど、菊乃さんは、わたくしが派手な衣装で大道芸をやるのが嫌みたいなの。武士の娘にあるまじき事だって」
「そりゃ違うよ」
八重は笑った。
「菊乃さんはね、あんたが大勢の女からちやほやされているのを妬いているんだよ。それに……」
と言いかけて、はっとして口を噤みました。
菊乃は、小夜が大名や旗本の奥方、姫君の閨の相手をしている事を知っているのではないか。そして、自分が用心棒になったら、その報酬が結局、小夜が閨の相手からもらった

お金から出る事になるのではないかと、そこまで勘ぐっているのではないでしょうか。
でも、それを口にすることは憚(はばか)られました。
一方で、八重の胸の裡(うら)に、今までにない感慨が湧いてきました。
あたいも、小夜さんも、結局、からだを売って稼いでいる……。だから小夜さんは、夜鷹の気持が分かっていて、それで助けてくれているんじゃないか。
「つまらない話を聞かせてしまったわね」
自嘲的に呟く小夜の肩を、八重は両手で抱きました。
「ううん。小夜さんの悩みが聞けてよかった」
それから、小夜の頬(ほお)に自分の唇を押し当てました。驚く小夜に、八重は言いました。
「あんたも、ちょっとかわいそうなひとなんだね」
「え？」
「これからは、寂しくなったら、あたいが慰めてあげてもいいよ」
その時。
走ってきた足音が不意に止まりました。
見ると、菊乃が肩で息をしながら、こちらを見ております。八重と小夜は、急いで身を離しました。
「菊乃さん」
八重は、作り笑顔を浮かべて、菊乃に歩み寄りました。
「いま、あんたの話を聞いていたんだ。噂をすればなんとやらだね。どうしたの？」
菊乃は唇を噛みしめて、八重の肩越しに小夜を見つめておりましたが、不意に踵(きびす)を返し、再び闇のなかに駆け去っていったのです。
「小夜さん、ごめん」
八重は、頭をかきながら、小夜に言いました。
「あたいが変な事したから、菊乃さん、怒っちゃったみたい」
「いいのよ」
小夜は寂(さび)しげに答え、八重の肩に顔をもたせかけて言いました。
「今宵は、八重さんの舟で寝たい。いいかしら？」
「いいよ」
「前みたいに、並んで寝るだけだから」
「わかってる」

肩を並べて去っていく二人の背後、柳の下に二つの視線がありました。
「あれが、小夜か……」
呟いたのは平井権八でした。その傍らに立っているのは、言うまでもなく小幡伝太夫。
二人は、居酒屋を飛び出した菊乃を尾けて、一部始終を見守っていたのです。
「いったい、今のはなんだ？」
伝太夫は、まるでわけがわからない、というふうに言いました。
「女同士でいちゃいちゃと……。まるで逢い引きのようではないか」
「まあ、そこは大事ではありますまい」
平井は、苦笑して言いました。
「なんとなく、絵が見えてきました。母衣菊乃は放っておいていい。あの小夜という女、何者なのか、試してみましょう」

翌朝。
八重の小舟で目を覚ました小夜は、夜鷹長屋で朝がゆをご馳走になり、そのまま自宅へと戻りました。
小夜の自宅は、ひいき筋の大名の奥方に斡旋してもらった、赤坂の外れにある原っぱに、生け垣に囲まれて建っている小さな一軒家です。
格子戸を開けてなかに入ろうとした時、
「おい」
と背後から声。
振り向くと、汚れた風体の浪人者が四人、油断なく身構えております。
「なんです？」
「小夜というのは、お前か？」
そう問われ、小夜はにやりと笑い、
「見知らぬ方々に名を答える義理はございません」
そう答え、浪人どもに背を向けて格子戸に手を掛けた刹那、背後の浪人が二人、抜刀しながら無言で走り寄り、同時に刃を振り下ろそうとした時、
「ぐぇ！」
「ぎゃ！」
同時に悲鳴があがりました。

小夜は振り向きざまに、唐人剣を抜いて一人の浪人の目を切り裂くと同時に、一人の浪人の股間を蹴り上げていたのです。蹴られた浪人が両手で股間を抑えてうずくまり、目を切られた浪人は、血を吹く顔面を押さえて棒立ち。小夜はさらにその睾丸を蹴り上げ、

「六つも潰したわ」

七転八倒して悶絶する浪人どもを見下ろし、冷ややかに言い放ちました。それから目線をあげて、離れた場所で茫然としている二人を見やって言いました。

「あといくつ、潰してほしいの？」

一人の浪人が「きえええええ！！！」と叫び声を発しつつ、斬りかかってきましたが、さっと刃をかわして浪人の懐に飛び込んだ小夜は、右手を相手の股間に差し入れ、睾丸をぎゅっと鷲(わし)づかみ、そのまま握り潰してしまいました。

浪人は悲鳴ひとつあげる暇もなく倒れ、その様に残る一人の浪人が踵(きびす)を返して逃げようとした時には、すでに小夜の唐人剣が、浪人の喉元(のどもと)に突きつけられていたのです。

「命が惜しければ白状なさい。誰に頼まれたの！」

怯えた浪人が、ちらりと背後に眼をやりました。

……こいつらを雇った奴が、後ろで見張ってる。

「し、知らねえ……」

「知らない？」

「本当に知らないんだ。四人で呑んでいたら、知らない奴が声をかけてきて、この原っぱに独りで住んでる女がいるから、強姦したら十両くれるというんで、それで……」

「その女とは、わたくしか？」

「そ、そうです……」

「その者は、わたくしの名をお前に告げたか？」

「い、いえ。その人も知らなかったようで……」

「そうか。で、お前はは……」

小夜は、浪人の顔をのぞき込むようにして問いました。

「十両がほしかったのか？　それとも、女を強姦したかったのか？」

「それは……」

浪人は、答えに逡巡(しゅんじゅん)しているようでした。小夜はさらに問いました。

「十両もほしいし、女を強姦もしたかったと、そういうことか？」

浪人は、小さく頷きました。その瞬間、小夜の膝が跳ね上げられ、浪人の股間に食い込

みました。浪人は絶叫してそのままくずおれ、ぴくりともしません。破裂した睾丸から溢(あふ)れ出た血が股間から噴き出し、血だまりを作りはじめました。他の三人も同様です。

「誰かは知らないけれど！」

小夜は叫びながら懐(ふところ)から財布を取り出し、中身を掴(つか)んでぱっと空中にばらまくと、きらきらと小判が宙を舞い、倒れた四人の男たちのまわりに着地しました。

「哀れな浪人者をこんな目に遭(あ)わせて、少しは罪悪感があるのなら、この金で、医者に診(み)せて治療してやりなさい！」

そのまま、すたすたと家に入り、ぱたんと格子戸を閉めました。

「やはり……あいつだ？」

原っぱの草に身を隠しつつ、様子をうかがっていた平井権八が、呟(つぶや)きました。

「やはり……とは？」

と問う傍(かたわ)らの小幡伝太夫に、平井はこう応じました。

「あの女が、芝新網町の夜鷹の用心棒の一味です。間違いありません」

言うまでもなく、四人の浪人者は平井や小幡兄弟に金で雇われた食い詰め者です。悶絶する四人を見ながら、伝太夫は呻きました。

「確かに、凄い腕だ。あっという間だった。瞬く間に四人のふぐりを潰した。信じられない」

平井は頷き、はっと何かに気づいたようです。

「われらの同志十六人を去勢したのも、あの女かもしれない」

「まさか……女一人で？」

「そうであっても、おかしくない」

平井は、憎悪の眼差しを小夜の家に向けました。

「いずれにしても、あの女は生かしてはおけません。男のふぐりを平気で潰すような女など、この世にあってはならない」

「確かにそうだが……」

伝太夫が言いました。

「あの女だけでなく、用心棒の一味を突き止め一網打尽にせねば、兄上の命令を果たした事にはならん。それに、あの菊乃という女は本当に用心棒でないのかどうかも調べにゃならんな」

「そうですね」

平井は意を決したように、ぞっとする程冷たい憎悪に燃えた眼差(まなざ)しで言いました。

「金や仕官の口で釣れる相手ではない事はよく分かりました。想像以上に厄介(やっかい)な相手。ここは、連中の弱みを探るしかありますまい。そして、どんな非道な手段を使っても、あいつらをこの世から抹殺するのです」（つづく）